



那須田務 ● Tsutomu Nasuda

推薦 2015年にリリースされたデュプリに続く濱田あやの新譜はバツハ。《クラヴィーア練習曲集》第2巻の2曲に《トッカータ》と《シャコンヌ》である。注目は使用楽器。スイスのヌーシャテル芸術・歴史博物館所蔵のヨハネス・ルッカース（1632/1745年）のオリジナルを弾いているのだ。アントワーブのルッカースは名器の誉れ高く、チェンバロのストラディヴァリウスと称される。18世紀にフランスの王侯貴族に愛好され、時代の音楽様式に合わせて改造された。この楽器も同様である。《トッカータ》二長調BWV912から目も覚めるような鮮やかな演奏を聴かせる。テンションが高くて即興

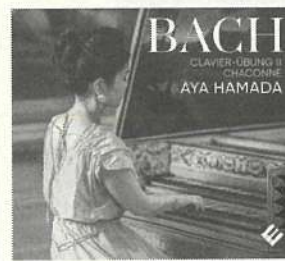
的名人芸的でブリリアント。《イタリア協奏曲》の両端楽章は音楽の強い推進力でダイナミック。それにしてもすばらしい楽器だ。強いエネルギーを秘めたパワフルなサウンドには腹の底に染み渡るような深みがあり、音の抜けが良く艶やかで楽器内部の豊かな響きを感じさせる。《フランス風序曲》は威風堂々。前半の繰り返しで入れる任意な装飾音はさりげなく曲に溶け込む。後半は力強く適進して息もつけないほど。後続の舞曲はリズムの扱いが洒脱。《シャコンヌ》はシユタイアーらも一目置く名チェンバリストのセンペが即興的に録音した演奏を、当人の許可を得て濱田が楽譜に起こしたものだ。バツハもこんな風にチェンバロで弾いただろうと思える説得力があり、濱田も明快かつ情熱に満ちた迫真の演奏を聴かせている。

峰尾昌男 ● Masao Mineo

【録音評】録音はこの楽器を所蔵する博物館内で行なわれたようで、特になわねの響きのようなものは感じられない。しかし、この録音は当時のオリジナルのバランスにも聞こえませんが、8+8のストップでもきれいに収録している。(92)

れたあの名曲だが、これをセンペという奏者が弾いた音源を濱田が多量の労苦を経て採譜したもので、チェンバロ編曲によって和声的充填や装飾音が豊かな響きの中で再構成されて、原曲とはまた違った感動がここから呼び起こされる。

奏を繰り返し広げている。また第2楽章では優雅な装飾音を交えたしなやかなカンタービレを聴かせてイタリア的な朗々とした歌い回しである。第3楽章も弾き手の左右が交差するフレーズを明確に示してリトルネッロ形式が明瞭に浮かび上がっている。《フランス風序曲》口短調BWV831は冒頭から決然としたメリハリのあるリズムで緊張度が高く、そして格調ある演奏を展開している。最後の《エコー》はまさにその効果を狙って瞬時の音色の交替が面白い。最後の《シャコンヌ》は言わずと知



THE RECORD GEIJUTSU 特選盤

■J.S.バツハ：トッカータBWV912
／イタリア協奏曲／フランス風序曲
(バルティータ)／無伴奏ヴァイオリン・バルティータ第2番～シャコンヌ
(S.センペ編)

濱田あや (cemb)
[EVIDENCE©EVCD074] オープン価格

草野次郎 ● Jiro Kusano

推薦 今回のCD、濱田はスイスにある名器ルッカース製のチェンバロを使って、バツハの編曲と即興に焦点を絞った選曲で構成された内容である。バツハは初期の頃からイタリアやフランスの作曲家の作品を編曲しその作曲技法を研究し蓄積してきたし、また即興演奏にも卓越していたわけである。《トッカータ》二長調BWV912ではまさに緩急の各部分に豊かな楽想と即興的な発想で1曲を構成している。バツハとしては若々しさと明るさがある軽曲である。次に《イタリア協奏曲》では原譜でバツハが指定したフォルテ（トゥッティ）とピアノ（ソロ）の変化を2段鍵盤の音色を効果的に弾き分けて鮮やかな演